# 26 本邦最初の西洋助産術教師 マティルダ・エアトン

石原　力

西洋助産術の教育が我国でいつから始まったかについての従来の記載には若干問題点がある。

緒方正清著『日本産科学史』によれば、明治九（一八七六）年「大阪医学校病院に於て産婆学教授を開始し、岡澤貞一郎講師を嘱托せられ、卒業者に産婆営業鑑札を与えたり。之れ我国に於ける産婆免許の嚆矢なり。之れと同時に東京〔府〕病院長長谷川泰も又産婆教授所を設立し、原桂仙に主任講師を嘱托し西洋助産学を教授せり。是れ東京に於ける産婆養成所の始めなり」とある。これが医事年表や看護史助産史に引用されてきた。

他方『岩波西洋人名辞典』等を底本とした藤井尚治編著の一八七三（明治六）年の所には「工学寮で招き日本初のアーク灯を点じた英電気学者エアトンの妻「女医」マチルダ東京に初の助産婦学校」という記事がある。この事実を羽田春兔前日本医師会長が強調した。私はその後長門谷洋治、蒲原宏氏の教示も得てエアトンの事蹟を発表（いずみ三七巻九号、一九九〇、ペリネイタルケア八巻五号、一九八九）した所、渡辺正之氏の厚意で所蔵の東京日日新聞コピーの送付を受けた。この貴重な資料から、新事実を補遺したい。

〔明治八年九月二十四日八二頁の記事〕「大坂にては此ごろ府庁より御触ありて来る四月八日を初として夫より七日目七日目の金曜日に府下の産婆ども残らず病院に出席し兼て御雇に成りたる産科に精しき西洋医師の講釈を聴聞し其術を伝習すべしと申し出されたり。（中略）伝習よく十分に出来たる上は免状を与へて渡世を為せ若し其心掛け悪しく伝習もせぬ者をば産婆渡世はおさし止めに相成るよし其礼は伝習中だけ毎月金一分づつなりとぞ誠に善き法なり東京にても斯ありたし」〔九年九月十五日所載東京府録事甲第九四号〕「産婆之儀是迄学科教授方並ニ技術試験之方法等モ無之候処今般東京府病院内ニ産婆教授

所ヲ設ケ技術教授並ニ試験之上仮免状下付候間此旨布達候事　但入学手続並ニ試験方法等ハ追テ詳細可相達事

明治九年九月十四日　東京府権知事楠本正隆」九年十二月十三日には四日付で東京府病院の産婆教授規則を公告、十年二月十五日を志願期限とした。〔十年五月三日公告〕「来ル五月十五日ヨリ産婆教授相開候也　時間ノ儀ハ午前第十時ヨリ十二時マデ　明治十年四月廿七日　東京府病院」従って開校は明治十年である。

Matilda Chaplin Ayrton（一八四六・六・二〇―八三・七・一九）の伝記については既述にゆずるが、日本における事蹟が不詳であった。東京日日の明治九年九月二十三日の公告に「英人エルトン氏妻来ル十月一日ヨリ五ヶ月間当院ニ於テ産科術ヲ講義致候間有志ノ婦人方来テ此科ヲ脩メンコトヲ請フ　但シ当院　医生前田政四郎ヲ通弁者トス　築地南小田原町四丁目十番地　築地病院」とあり、また同年十月十日九五〇頁の記事に「南小田原町の築地病院にて（中略）月曜日には英国のエールトンと云ふ婦人が出張して講釈を致されますと申すこと」とあり、伝記の「原住民助産婦のための学校を開き、そこで通訳の援助によって彼女自ら講義した」というその時期、場所、規模、方法が明らかになった。東京府病院産婆教授所よりも七か月早い。

一九九二年十月二十二日、私は彼女の夫ウィリアムの墓のあるというロンドンのBrompton Cemeteryで彼女の墓を見付けることができた。そこには〝Fervent in Spirit〟（熱烈な精神の人）という字が刻まれ、再婚した夫の墓はその傍にはなかった。

（賛育会病院）